海外の舞台で活躍！ 岩手中部ボーイズ 中崎太雅さん

ラテンアメリカ野球選手権大会に出場

本町拠点の中学校硬式野球チーム「岩手中部ボーイズ」の中崎太雅（なかざきたいが）さん（矢巾北中学校1年）が、7月17～25日にプエルトリコで開催された「ラテンアメリカ野球選手権大会」に日本チームの一員として出場しました。同大会は、毎年夏に11～12歳のチームを対象に開催されている国際野球大会で、10の国と地域が参加。日本チームの派遣は今年で3回目で「TOMA Dream School SENDAI」（仙台市）主催の選考会に中崎さんも挑戦し、見事チームの一員に選ばれました。

当初二塁手としての選抜でしたが、現地では捕手として、予選リーグと決勝トーナメント8試合のうち5試合にスタメンフル出場。さらに、予選リーグでは、サヨナラタイムリーヒットを放つなど打率は3割を超え、攻守ともに大活躍でした。中崎さんをはじめチームが一丸となって戦った結果、日本チームは第4位に輝きました。中崎さんは、捕手として「相手はみんな体格が大きく、足も速かったので、落ち着いて対応するように心がけました」と試合を振り返り、大会中に行われた他国チームとの交流については「現地の習慣に少し戸惑いましたが、みんな陽気で盛り上がりました」と笑顔を見せていました。

高橋昌造町長に帰国報告をした中崎さん
（写真左から岩手中部ボーイズ 廣田淳代表、中崎さん、高橋町長、中崎さんの父 継之さん）

将来の夢はプロ野球選手と話す中崎さん。「このような機会を与えてもらったことを感謝し、今後はもっと練習に励みたいです」と目を輝かせていました。

宮沢賢治と矢巾町

～「銀河鉄道の夜」の舞台は南昌山～

第10回

宮沢賢治と矢巾町のつながりを紹介するこのコーナー。今回も「銀河鉄道の夜」について、南昌山や本町出身の親友、藤原健次郎に関わる記述の一部を紹介します（解説は「矢巾町宮沢賢治を語る会」の松本隆会長によるものです）。

「銀河ステーション」

▼**記述** ジョバンニが銀河鉄道に乗車すると、前の席に「ぬれたように真っ黒な上着を着たせいの高い子供」（カンパネルラ）がいることに気づく。

▼**解説** 体格が大きく、さらに県外遠征からの帰り、二泊三日雨に濡れながら歩き続けた健次郎のイメージをもとにした表現と考えられます。

「北十字とプリシオン海岸」

▼**記述** 「白鳥停車場」で降りたジョバンニとカンパネルラは、汽車から見えた白い川原に向かう。川原でカンパネルラがきれいな砂をつかみ「この砂はみんな水晶だ」と話す。

▼**解説** 賢治が南昌山をイメージして描いた童話「鳥をとるやなぎ」（詳しくは、平成28年6月号の第8回を参照）に似た情景が描かれており、煙山付近の岩崎川の河原をイメージしたと考えられます。

「ジョバンニの切符」

▼**記述** カンパネルラがきれいな野原（天上）を指さして「あそこにいるのはぼくのお母さんだ」と叫んだ。

▼**解説** 健次郎の母、藤原トキさんは、健次郎が亡くなる二カ月前に亡くなっています。賢治は、健次郎の家を訪れた際にトキさんにもお世話になっており、感謝の気持ちを込めて取り上げたと考えられます。

▼**記述** カンパネルラとの最後の会話でジョバンニが「みんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼（や）いてもかまわない」と決意を語る。

▼**解説** 賢治が病床にあった健次郎に対して送った2通目の手紙で伝えたかった「社会の役に立つ人として生きる」決意を述べたものと考えられます（健次郎への手紙については、平成28年2月号の第6回を参照）。

「銀河鉄道の夜」には、親友藤原健次郎やその家族、南昌山で遊んだ思い出などがちりばめられています。松本会長は「賢治は、健次郎の死から20年間思い続けた決意と感謝の気持ちを、童話の中で伝えたいとの思いから、この作品を書き遺した」と分析しています。

【つづく】

※「宮沢賢治と矢巾町」は「矢巾町宮沢賢治を語る会」の松本隆会長に監修および写真、資料の提供をいただいています。